

第5回大都市戦略検討委員会における主な意見

<都心の国際化戦略～大阪圏における議論に向けて～>

- ・大都市戦略という概念をもっと広くアピールしなければならない。大阪圏については、大都市としての戦略が必要であり、国際化にどう対応するのか、といった視点が必要。
- ・都市政策を考える上で、「Liveability」、「Mixed Use」、「Connectivity」、「Walkability」、「Management」という5つの観点が非常に重要である。
- ・大阪圏のあり方として、「観光拠点」、「医療拠点」、「スーパー・メガリージョンにおける西の牽引拠点」、「首都代替拠点」といった方向性が挙げられる。
- ・鉄道沿線を軸としたまちづくりでは、吹田市（岸辺駅）の医療に特化した事案のように、付加価値のある機能を駅周辺部に集積する考え方が非常に重要である。
- ・観光振興とMICE振興を一体として捉え、「観光MICE」を意識した大都市戦略は当然必要である。今回の大都市戦略の中に「観光MICE」を位置づけるべき。
- ・ベイエリア等の観光MICE拠点のあり方というものも、大都市の戦略の中では重要である。大阪湾ベイエリアについては、物流施設と観光MICEの施設が混在する可能性があるので、計画的に進めなければならない。
- ・都市内河川における景観形成や河川空間の商業的な利活用を通し、河川の軸に応じて複数の都市再生の拠点を繋ぐといった視点も必要。都市内を流れる河川の周辺部の都市再生をすすめ、防災性能を高めながら、河川を軸とし、新たな大都市機能を形成していくような議論と計画が重要ではないか。
- ・大都市におけるコンパクトシティは、機能面で「観光MICE」や「健康・医療」等に特化するなど、特徴的で付加価値が高くなるものをイメージしている。資料中では「プレミアムコンパクトシティ」と称しているが、コンパクトシティの上位概念となるようなものについてもっと考えるべき。

<都市の国際競争力・都市再生について>

- ・今の東京の国際競争力については、東京の規模を考慮すれば、弱すぎると思う。例えば、東大病院でもすぐに英語が通じないことや、外国人向けの学校の費用が高すぎるなどが挙げられる。
- ・大都市は国際的に多様なビジターが訪れる場所であり、多くの人が行き交う場所だと考えると、大都市は日本国土の「ショーケース」または「ショーウィンドウ」なんだという位置づけを打ち出せばよいのではないか。
- ・高付加価値型の産業集積を高めれば高めるほど、大きく地域の生産性に寄与する。しかし、高付加価値型の産業集積が、付加価値の低い産業が付随しなければ機能しないこともある。そのため、ごく狭い範囲で高付加価値となっても、少し広く捉えると高付加価値ではない産業構造となっている場

合もあり、全体的な視野で地域の産業構造や産業誘致を考える発想が必要。

- ・大都市における国際競争力の強化に伴う地方へのプラス効果については、もう少し具体的に考えるとよいのではないか。例えば、大阪の医療特区の場合に、先進医療と関連する「教育」や「食」等の機能の面で他の地方都市と連携できるのでは。特区推進に必要な機能を全て大都市側で用意するのではなく、連鎖反動的な連携の仕組みを打ち出すことにより、その連携によって地方へのプラス効果を目に見える形で示せると思う。
- ・人口減少の中、東京圏が成長を維持させるために、地方から人口を引きつけなければならないという条件のもとでは、「どうやったら地方へのプラス効果を見出すことができるのか」が今後の大きな論点の一つになると思う。「大都市が主で、地方が従」といった一次元的な観点だけではなく、観光やMICEのようなところで、国際競争力の尺度感を多様化していかないと、大都市と地方がウィン・ウィンの関係になるような論理はつくりにくい。
- ・地方都市の拠点の構成が3層構造ぐらいになるのに対して、大都市は第1層目である都心に非常に多様な拠点がある。大都市の場合は、丸の内や銀座、六本木といったエリアの単位でそれぞれの個性を伸長させることを第1の戦略に置くべき。
- ・水と緑のネットワークについて、国際的な競争力という観点をあわせて考えると、日本型もしくはアジア型のネットワークをどう空間的に捉えて整備していくか、さらにはどう国際的に発信していくかが重要である。
- ・皇居や明治神宮のような権力ないしは宗教上の空間が、実は巨大なボイドとして生物の多様性に極めて大きな意味を持つことは、欧米には見られない非常に大きなポテンシャルであると考えてよい。
- ・近年、民間でも公開空地等において生物多様性を前向きに担保するような動きがある。今後、特に都心3区を中心とした都心部において、こういった民間活力による緑のネットワークをどう繋げていくか、考えていくことが重要。

<大都市圏での高齢者の急増等について>

- ・子供が生まれる町をつくる必要がある。東京の一極集中が悪いとは思わないが、十分に活かされているとも思えない。若い女性を集めているのに、子供が産まれていないという状況を何とかしなければならぬ。
- ・国土のランドデザインでも議論しているが、3世代同居、近居、地域コミュニティの強化が大事である。東京の郊外でもさまざまな新しい試みが出てきており、非常によい傾向である。
- ・首都圏における少子化や女性の働き方の問題に関して、人口移動、出生率、就業率だけで説明しているが、見落としている点がたくさんあるように思う。25～49歳の女性の首都圏からの転出理由が結婚を起因するものだと考えると、首都圏の出生率が低い理由は、保育所がないというだけでなく、

結婚しない男女が相対的に多いからなのかもしれない。また、女性の就業率の点で、共働きの必要性が、所得水準の違いにより、首都圏と地方で異なることはないだろうか。

- ・女性や高齢者の就労とあわせて、育児と介護を三つどもえで政策を検討することが必要である。今は出産年齢が上り、子育てから介護までの期間が短くなっている。育児環境、介護環境、人手不足の問題を考慮したモデルケースを提示することが重要。
- ・東京圏の介護需要予測に合わせて介護施設を増やしても、今度は人手不足が起きる。介護施設はできたものの、人手が確保できずに実質閉鎖状態になる施設も出てくるのではないか。
- ・人手問題の解決策としてロボットの活用が挙げられるが、就業人口にカウントできるぐらいのロボット開発等も考慮しながら、将来を考えたらいいのではないか。
- ・国際競争力のある大都市を考える場合、今までの延長線上にある知恵や力で対処できるように思うが、今後、さらに高齢化が進む生活の場としての大都市を考えていく場合は、全く未知の世界であり、強い危機意識が必要である。
- ・人口減少・超高齢化により大都市圏、とりわけ23区内を支えてきた大都市近郊の居住地帯が急速に大混乱に向かうのではないか。人口減少・超高齢化の危機意識を地方は既に共有しているが、大都市行政の方こそ、その危機意識を共有する必要がある。大都市戦略ビジョンにも、この危機意識を明記すべきである。
- ・基礎自治体単位で少子高齢がやってくる都市のビジョンをしっかりと持つ必要がある。また、基礎自治体においては、企画部や都市計画部といったハード中心のセクションと高齢者を所管する保健福祉部のようなソフト中心のセクションが垣根を越えて連携しなければならない。
- ・今後の看護・介護の労働力不足を解消するために、介護ロボットだけではなく、良質なICTの活用が必要である。地域で住み続け、衰えないよう頑張ることを目指すケアシステムを意識したICTの開発が必要。
- ・東アジアの経済発展国の都市はほとんど、今後、日本と同じような状況を迎えるので、少子高齢化を乗り切る都市のモデルケースを日本が先陣を切って作り上げるというポジティブな感覚で、今回の危機意識を打ち出せばよい。
- ・郊外については、暮らしの場であることをベースとしながらも、高齢者の働く場の創出や水と緑のネットワークの活用といったように、新しい郊外のあり方を考えなければならない。現状では、「郊外は鉄道があり暮らしの場。働く場所は都心で、生産年齢は電車で通勤してくださいね。」といった従来型の大都市圏構造のイメージが強く、新しい大都市戦略を打ち出すには物足りない。

<大都市の災害への脆弱性について>

- ・大都市圏において、「災害が来たら逃げろ」と言っているようでは、世界一級の人に家族連れで滞在し

てもらえるようにはならない。災害に対して逃げずに真っ向から対処する視点も必要ではないか。

- ・アンケートによると、各大都市が首都圏のバックアップ機能を持ちたいと言っているが、被災地の早期復旧には、大都市、地方関係なく、被災地の一番近隣で無事な市町村が一番の助けになる。無事に残っている市町村に対し、どれだけ人的・物的な補給ができるかが、大都市圏に必要な観点であり、現実的な立場で圏域の役割を明記すべき。
- ・大都市の被災については、災害の規模によって、バックアップとなるエリアが変わることを想定すべきである。非常に激甚な災害の発生も想定し、どのようなバックアップがどこにあればいいのかなど、もう少し様々なイメージをして、対策を検討することが必要。

<大都市圏内・圏域間の役割分担と連携について>

- ・リニア開通の影響として想定されている「人流の増大」のところで、東京に人材が集中することによって、名古屋などの大学の活力が失われるとは考えにくい。また、「通勤・通学圏の拡大」のところでは、日帰り出張増による現地支社等の撤退の可能性が示されているが、名古屋や大阪は市場規模、経済規模が大きく、支社が撤退することはないと思う。
- ・大都市圏の役割として東京、名古屋、大阪が一体となってスーパー・メガリージョンをつくっていきこうとする動きは有意義であり、今後の成長のエンジンとしてスーパー・メガリージョンが果たす役割は大きいと思う。
- ・リニアの影響については、中部国際空港のように東京を経由せずに国際分業ができる体制を築き、世界とダイレクトに結びついた地域が、リニアによってさらにどうなるのかという観点がほしい。
- ・農地が都市の市街地と混在していることを、レガシーとして積極的に位置づけていく観点が必要。農地には高齢者の就労の場としての役割や、防災上の役割も期待できる。
- ・これからの水と緑のネットワークについては、民間の力を積極的に活用し、かつ、暫定であることに對しても積極的な意味合いを見出し、小規模のものをうまく結びつけることが必要である。こういった従来にはない緑の捉え方の中から、日本もしくはアジアに特化した新たな緑のネットワークのあり方を展開していくことが、結果的に国際的な競争力の向上にも繋がるのではないか。
- ・観光についていえば、従来の観光都市の概念を改め、クオリティを高めなければならない。少子高齢化と同時に、国内の観光客の激減が予測される一方で、外国人観光客でそれを補完すべき。
- ・ロンドンでは都市の価値を高める手段として観光が非常に重要であるということで、従来の観光セクション、投資を呼び込むセクション、留学生誘致のセクションが合併し、新しく財源を持った組織が立ち上がっている。日本でも従来型の観光誘致策ではなく、幾つかの対外的なシティプロモーション事業をセットにした施策や、都市再開発のようなプログラムと連動する施策を今後考えていくべき。
- ・大都市として、一くくりにできない議論をどうやって収束させていくか。それには、まず、各々の都

市の実力を認識し、国を引っ張る成長エンジンとしての都市、多様な世代の人たちの豊かな暮らしの場を実現する都市といったように、進むべき道を都市毎に見極めることが必要ではないか。

- ・国際競争力について、東京と他の都市には圧倒的な実力差があり、立ち位置も異なるので、それぞれの立ち位置で特色を出すことについて、より明確にする必要がある。地方へのプラス効果についても、都市の規模や実力によって、その影響や範囲も違うので、都市によって異なる戦略が必要である。

<その他の意見>

- ・まちづくりの担い手については、民間企業、市民、NPO、大学等の普通の人繋がりを持って公共を担っていくことが大事である。行政は基本的なものは提供するが、その機能を育て、担っていくのはやはり民間だと思う。
- ・京都では、観光客が落としてくれるお金については、ほとんどが国に納めなければならない、自治体としては観光客のごみ処理などのコストが増加し、実際は非常に財政的には厳しくなっていると聞いている。観光に力を入れて行くのであれば、税収の仕組みも変える必要があるのではないか。
- ・ビジネスや観光など、セクター別にいろんな戦略を立ててしまうと、魅力がなかったり、うまくいかなかったりする。例えば、東京にビジネス目的で訪れたビジターはずっと都内にいるわけではなく、観光地に行ったりもする。様々なところで連鎖した総合施策という観点を積極的に取り入れる必要がある。
- ・人材不足に関しては、介護だけでなく、全ての分野に関連する問題である。今後のことを考えると、広めに人材戦略を考え、人材の適正配置をうまく促す国土政策が必要ではないか。
- ・大都市戦略ビジョンのとりまとめにあたり、各委員から様々な意見が出てきている状況ではあるが、実際に実行可能でリアリティのある戦略を打ち出してもらいたいと思う。
- ・今後は、成長時代の価値を転換して、新しい価値軸を鮮明にしていくことが必要である。例えば、大都市特有の沿線まちづくりの推進をはっきり明示することや、防災・物流・緑のネットワークについては守りから攻めに転じるというイメージ。今まで進まなかった施策が、違う価値軸を置くことで進めることができるのではないか。
- ・官民連携のオールジャパンのあり方についても、従来の枠を超えた新しい軸を鮮明にできればよい。大都市の成長のためには、市場原理に委ね、民間の活力を最大限に引き出すことと同時に、市場の暴走を防ぐ観点も必要である。それを踏まえると、官民連携の中で、長期的視点を見据えた先行投資に対して、政策側の支援や規制緩和を行えばよいと考える。
- ・資料の中で「～すべき」となっている表現が気になる。戦略という観点からいえば、大都市の成長についてあるべき姿を実現する手段にまで突き詰めなければならない。
- ・全体的な論点について、全般的に平板単調であり、多様性やこれまでとは違う尺度構成を

もう少し考える必要がある。